

北京日記 6

- 1 / 1 (木) 正月・凧揚げ
- 1 / 2 (金) 新年会
- 1 / 3 (土) 辻氏、李強先生
- 1 / 4 (日) 張先生夫妻、李先生夫妻
- 1 / 5 (月) 楊・沈先生、送迎会
- 1 / 6 (火) ZW さん宅、人民大学院生会食
- 1 / 7 (水) 葉先生
- 1 / 8 (木) 帰国

1 / 1 (木)

年賀メールを発送。多すぎたのか上手くいかないの、分けて送る。

菊正宗でおとそ。恵子が苦労して作ったおせちと雑煮。

書き初めの練習をする。王羲之から「知」と「足」。前に書いた「心」と「楽」も、練習し直す。大判の紙に「知足」と書く。半裁にして「知足心楽」。まあまあの出来だ。

サンドイッチの昼食。

凧揚げに出かける。人民大学前から 356 バスで万泉河方面に乗る。以前に見つけておいた公園を目指す。ガタガタバスで、エンストするのをなだめながら女運転手が運転する。乗客はどんどん降りて、最後の一人になる。どこまで乗るのかと訊かれても困る。もっと先だというのが、分からない。凧糸巻きを見せると、納得したのか走り出す。車庫まで行って、下車。万泉庄の中だが、公園はない。歩くと4環状線に出たので、東に向かう。右側に緑地が見えるので行ってみると、ゴルフ場でダメ。もう少し歩くと、空に凧が見えた。4環の北側だった。

広い公園で、中ほどに池がある。氷っていて、みんなが滑りながら歩いて楽しんでいる。少し歩いてみるが、硬い氷で丈夫だ。

脇の芝生で凧を組み立てる。凧を見て揚げはじめると順調に糸が出る。北京の正月に龍が登る。ほかの凧を越えてどんどん登る。昼の月のそばに小さく龍が舞う。1km の糸が全部出た。ほとんど見えなくなってしまったが、糸の手応えはしっかり有る。少し下ろそうと巻始めたとき、手応えが消えた。

北京の手作り龍凧は、北京の青い空にさまよい出てしまった。風向きからすると、市内の中心方向に飛んでいったのだろう。糸だけを巻き取ると、かなり凧に近いところで切れている。なぜか、さっぱりした気分で帰途に就く。

初風呂に入ってワイン。

元日の新聞トップは、胡主席の新年メッセージ。小康社会の建設と持続可能な発展が 2004 年の第一の課題と。社会面では、アンケート調査の結果。1万 5000 人を対象とした調査で、改革開放によって誰が一番利益を得たかという質問に、60%近くが、政府官僚と回答した。

政府官僚は、毛沢東時代から優遇されていて、改革後に特段に待遇が良くなったわけではないから、この結果は、政府官僚が給与以外に賄賂などで富裕化することへの庶民の批判を含んでいると分析している。1970年代後期以来、3人目の処刑者が政府幹部から出るような事態ばかりでなく、ごく身近な経験が庶民意識を強く規定しているのだろう。

共同利用室の守屋先生の新年会に、恵子のおせちを届ける。お返しに、手作りワントンを頂いた。

夕食はパエリャ。恵子のパエリャは初めて食べたが、案外美味しい。

天安門での凧揚げもしたいので、残りの材料で、簡単なゲイラタイプの凧を作る。明日、字を書こう。

1 / 2 (金)

今日も晴天。雑煮の朝食。

新聞はトップで小泉首相の靖国神社参拝批判。王副外相の参詣を批判する談話を報道しながら、韓国の反応、野党の反応を紹介している。信念の強いところを見せようというパフォーマンスだろうが、外交能力の欠如を示すだけだ。経済関係の深まりと外交関係の冷たさは、奇妙なコントラストだ。いくらODAを積んでも、チチハル毒ガス事故の補償をしても、仏作って魂入れずになる。

帰国留学生が増え続けている記事。広州市の第6回海外人材交流会には、初回よりも10倍の3500人の留学生が参加した。北京ではこれまでに5000人が帰国して2000以上のベンチャーを中関村周辺で立ち上げ、上海でも2450企業が帰国留学生によって経営されている。政府の優遇政策が奏功しているようだ。

中小企業奨励の記事。中小企業振興は、雇用対策としても、また農村部の向上にも有効であるので、2003年1月から、中小企業振興法が施行され、信用保証機関の新設など金融面での措置に、政府は力を入れている。これまでに、58万人の雇用を創出したとされる。

2時頃から、みんなで新年会。恵子と元の手作りおせちを中心に、それぞれのお料理を、材料を持ってきて作ってくれる。野菜と肉炒め、粉から練って作った餃子。餃子の作り方も、個性がある。小さくて可愛いのか、大きくて太っているとか。

ZXさんが「縁」と書き初め。良い字だ。ほかの皆さんは筆は取らないらしい。LYさんに「楽」と書いてあげる。凧には「知」。

ZYさんが、足を捻ったので病院に行く。たいしたことはなく、後から参加。楽しい北京の新年会だった。CDラジカセとCDを社会研究室にプレゼントした。

1 / 3 (土)

9時ころ燕山大酒店に昨日北京に着いた辻康吾氏を訪ねる。ここでの見聞について話すと、やはり、もっと深い奥があることが判った。たとえば、死刑囚から腎臓移植を受ける予定の人が、手術予定日つまり死刑執行日に発熱したので、死刑を2週間延期したという話をする。辻氏にいわせると、それは普通のこと、死刑囚を買い戻すこともできるという。死刑判決を受けた人物が、翌日、にこにこしながら街を歩いていることがあっても不思議

ではない。日本の女性実業家が、中国につくった若い燕が、汚職に連坐して終身刑になったときに、金を払って20年の禁固にしてもらった。そして、監獄の敷地に一軒家を建てて、同棲できるようにしたという話。

腐敗で死刑判決を受けた上級幹部は、権力闘争に敗れた結果であって、負け犬は叩かれるが、勝っている内は大丈夫というのが庶民の感覚。

建築労働者の賃金未払いに関しては、某市の裁判所が新しい建物を建てたが、資金不足になって建築費を払わなかったので、建築業者が提訴したら、その裁判所は訴訟を受け付けなかった話。上級裁判所に提訴しても棄却されてしまったという。

農村の貧困状態に農民はよく耐えていると話したら、耐えずに反抗する事件は頻発しているのが現状で、報道されないだけとのこと。そして、中国社会科学院農村社会研究所の所員が書いた、湖南省の農村に黒悪組織があって権力支配の一翼を担っているという論文を見せてくれた。ヤクザのような結社があって、農民からの上納金の取り立てをしたり、反抗する農民を暴力的に弾圧したりするという。地方幹部が組織の一員の場合もあるらしい。密航斡旋のヤクザ、蛇頭の話は有名だが、地方組織にヤクザがかかわっているとは驚きだ。新聞を読んでいるだけでは判らない部分が多いらしい。

清華大学人文社会科学院院長の李強教授、李平・易友人先生ご夫妻、北京朗創光電科技有限公司社長の馬承東氏、Salsys 中国事業推進部の莊英甫氏とホテルのレストランで昼食。中国語の会話で、判らないが、政治問題などを論じているようだ。辻氏の解説によると、毛沢東の評価、現執行部の評価など、極めて率直に語り合っている。日本の賠償問題では、新中国が中華民国を継承する国家ではなく新しい中華人民共和国として建国されたところに問題がある。このため、蒋介石の中華民国と日本の条約で無賠償が確定され、新中国の請求権が法的になくなった。日中国交回復の際に、日本側はこの論理で中国側の賠償支払い要請を拒否した。周総理はこの論理を主張する条約局長を「法匪」と批判したが、結局、無賠償を認めた。これは、当時、中ソ関係が悪化していたという事情の産物だった。

ジャーナリズムでは報道されないが、一般社会では、活発に政治批判が行われているようだ。前から、中国は口コミ社会だとは感じていたが、やはりそうなのだ。会話が判らないと、この国は判らないということだ。アワビの丸煮など豪華な昼食で、李教授にご馳走になってしまった。李教授が来日したときに辻氏が接待した返礼の宴に便乗したらしい。

辻氏のお土産のバッテリーをもらって帰宅。

夕食は、ご飯と海苔でさっぱりと。

1 / 4 (日)

このところ、冷たい空気で咳がでるから散歩はサボリ。李強先生に『概説日本経済史』を郵送する。11時過ぎに張淑英先生が迎えにきてくださって、地安門大街の巴国布衣風味酒楼へ。中国銀行本店人事部副部長のご主人と会食。ご主人ご持参の長城ワインで乾杯。タウナギとシトウの炒め、鶏のエッセンスを卵白でハンペン状に固めたもの、沢山のキノコのスープ、スナック豌豆炒め、ギンナンと青梗菜の傷め、餃子、清湯面など。

中国銀行の株式公開問題、不良債権処理問題、BIS 規制問題、人民元問題、住宅金融問題などを伺う。住宅金融は新しい個人ローン分野で、売買価格の 70%を 5.7%で、有担保で貸し付けている。70%は大きい方で、普通の商業銀行は 50%とのこと。住宅価格は、北京オリンピックまでは上昇するだろうが、中央政府もバブルには警戒して、人民銀行は商業銀行の住宅建築資金融資を制限する通達を出した。

株式公開には、自己資本比率の向上、債権処理の積立金の充実、不良債権処理、コーポレート・ガバナンスの整備の 4 条件をクリアする必要がある。時期は、来年が予定されているが、実行されるかどうかはまだ判らない。4 大銀行が一斉にということにはならないだろう。中国建設銀行の不良債権比率が中国銀行より低いという数字には疑問がある。

人民元は、今のドル・ペッグから、数種の通貨バスケット方式に代わって小幅に切り上げられるだろうが、時期は不明。

張先生から、中日経済研究センターの特別高級研究員就任のお誘いがあったのでお受けした。伊丹敬之氏の本の翻訳についての質問に答える。「水戸黄門の葵の印籠」など、たしかに中国人には判らないだろう。

店を出るときに、シンコ細工のように、うどん粉で鳥を形作って色を塗る細工をしている人が居て、作品をひとつくれた。2羽の小鳥が止まり木に止まっている可愛いもの。

お別れしてから、持参の凧を揚げに天安門へ。ところが少しも風が無く、ひとつも凧は揚がっていないので諦めて帰る。天安門デビューは出来そうにない。

一休みしてから、李先生と待ち合わせのイケヤに行く。ご主人も一緒に迎えにきてくださる。歩いてご自宅に。元が内装を見学して、模様入り磨りガラスや南洋材の床板に感心。ガラスは 100 元台と伺って、今度訪中したときに日本に送りたいと言い出す。送料がどのくらいかかるものやら。

餃子作りの道具などを頂いて、海鮮料理店へ。北京大連漁夫で、生き魚がある。いろいろ注文していただく。まずは、当店特製の温かい豆乳。ビールと紹興酒。紹興酒はビンからポットに移して生姜の千切りを入れて温める。生姜の味と香りが付いて初めての味だ。前菜は、タコの千切りのからから揚げとキャベツのサラダ。当店特製の豆腐。堅めの木綿豆腐を温めて醬をかけて食べる。フカヒレのスープは、濃厚な鶏などのスープで煮込んだもので、しっかりした味わい。紅色の酢を入れるとマイルドな味に変わる。アワビは一人ひとつの煮込み。移動式コンロを室内に持ち込んで、調理済みのアワビを、目の前でスープで煮込む。甘じょっぱい味付け。後からご飯を入れてスープを食べる。エビの塩茹でと唐揚げ。鶏の唐揚げ。スープで煮込んだ鶏を唐揚げにするという手間のかかった料理。ギンナン・松の実・百合根の炒め。フルーツ。中華料理を堪能した充実感を味わった。再会を約してお別れ。

賓館のスーパーでアイスクリームを買って帰宅。

1 / 5 (月)

昨日の新聞では広州市の患者は SARS の可能性が大きいようだ。流行することはないだろう

う。今日の新聞では、患者のアパートのネズミからもコロナウイルスが検出されたので、感染経路のひとつとして追跡調査されているという。トップは政府情報の発表方法を改善するという記事。隣は、火星探査機の写真。

小トピック欄には、各地の話題。北京の銀行警備員が、600 元の月給では苦しいので夜は泥棒になる話し。北京で賃金未払いの労働者が支払い請求にいった会社の前で変死した事件。山西省で中学生が小遣いほしさに送電鉄塔のボルトを外したら鉄塔が倒れて大停電が起こった話。重慶で腎臓に効くという民間療法でネズミの尿を呑んでいた女性が細菌性肺炎腫になった話。麻薬密売で5年の禁固刑になった男性が HIV 患者である理由で保釈中に、またヘロイン 382 g を所持して逮捕され処刑された話。中国南西部に住む住民の5人に4人は汚染された水を飲用していて、55%の住民は強い汚染度の水を飲んでいるという報告。湖南省の女性警察署長が、犯人の家族から 2001 年5月から12月の間に28 万元を収賄して15年の禁固に処された話。まあ、暗い世相だ。

11 時半に楊先生と沈先生がお別れに来てくださる。天外天で昼食。いろいろ中国事情をうかがう。農民の経済状態の向上には負担の軽減が必要で、税と費、つまり国税と地方費負担のうち、地方費賦課を禁止して税に一本化する方向にある。村・郷の公務員の給料は、従来、費から支出されていたが、税からの支出に切り替えている。地方都市では農民が都市戸籍を取るの簡単になったが、戸籍を移すと農地使用の権利が失われるので、転籍を好まない農民も多い。零細農耕の非効率を解消するために、兼業農家による農地使用権の貸し出しも行われている。

幹部腐敗の問題は深刻で、なかなか法治国家には至らない。大学の法学部が中国では弱体なのは、法曹家の発言力の弱さを反映している。既存の権力が強い場合には、法的な権利主張よりも、権力者への接近の方が問題解決の早道になってしまう。などなど。

日本研究院には9月から経済系の院生も入学するので、秋に講義をすることを約束してお別れ。

5:40、迎いのバスで送迎会へ。蜀都紅で、北京外国語大学が、センターの日本派遣教員を慰労してくれた。副学長が小泉靖国参拝を批判しながらの辛口挨拶。離任者を代表してご挨拶。「縁」を続けて日中友好に役立ちたいと感謝表明。周先生・宋先生ともお別れの挨拶ができて良かった。

1 / 6 (火)

10 時に賓館正門で2年生と待ち合わせて、3年生の ZW さん宅にタクシーで。北京市の東側、朝陽区の5環路の外側、北京第2外国語大学の近くの社区の1階が ZW さんの住まい。比較的古いアパートで、中央が玄関・台所・手洗いスペース、その両側に部屋がある細かい間取り。ご主人はエンジニアで上海へ出張中、坊やとご主人の母上の3人で住んでいる。結婚記念写真が掛かっていて、ZW さんのウエディングドレス姿がとても美しい。

ヒマワリのタネをかじりながら、2年生の皆さんとおしゃべり。そろそろ春節で、自宅に帰る時期なので、切符の手配をしている。普通料金は学生割引で半額になるが、寝台料金

分は割引にならない。福建や山西など遠いから時間が掛かって大変だ。

沢山の手料理のご馳走になる。蒸し餃子は、木の葉模様に包んであって見事。フナのスープは、以前から作り方を知りたかったもの。フナを一度油で揚げてから大根と煮込むと、乳白色のスープになり、特有の臭みも取れることが判った。食後は、持参の大きなケーキに、坊やの今年の歳、4本のローソクを灯してお祝い。

ZWさんとお別れしてから、近くの建材市場を覗いてみる。模様を彫り込んだドアサイズのガラス板が、150元前後で売っている。日本に送っても安い値段だ。市場で皆さんと別れて、潘家園古文物市場へ行く。なにも買わずに、バスに乗るが、道路混雑で時間が掛かり、易先生との待ち合わせ時間に遅れてしまった。

九頭鷹で、易先生、人民大学の院生4人と会食。1年生でこれから文学や言語の修士論文のテーマを決める。敬語を扱いたいという院生がいるが、日本語の敬語はなかなか難しいし、最近はかなり敬語表現が乱れてきていること、日本人の若者で、正しい敬語がつかえる人は多くないことなどを話す。すでに大学教員の院生もいて、やはり教員待遇を受けながら、大学院で勉強できる。日本も学ぶべき良い制度だ。易先生からは立派な花瓶、院生の皆さんからは可愛い焼き物をいただいた。

帰室してからは、荷物の整理。

1 / 7 (水)

今朝も散歩は中止。10時ころセンターに行き、机を整理する。持参した書籍を図書室に寄付。『概説日本経済史』と『父と子が語る日本経済』を、文学系院生で、広州の大学で経済・経営関係の日本語を教えることになったOYさんへあげる。南開大学日本研究センター紀要の論文コピーの残りは社会研究室で適当に配布してもらうことにする。パソコンの中も整理するが、元を連れてこなかったため、8/22以前の状態には戻せなかった。

昼食後、中日友好医院に葉綺先生を訪ねる。立派な病院で、西門から入って行くと、鑑真和尚の座像がある。東門近くの国際病棟までかなりの距離があった。日本語の上手な受付を通して、面会を申し込むと、看護婦が病室へ案内してくれた。昨秋の訪日の際に転んで肩と肋骨を骨折されたために、すぐ帰国されて、ご自分の病院に入院しておられる。

東北で敗戦を迎えた時、15歳だった葉先生は、ご自分で中国残留を希望され、ご両親と別れて中国革命のなかで医者となり、今日まで中国で医療奉仕を続けてこられた。経営史研究所の河上さんが浅田石二のペンネームで『あじさいの花』と題した本を出版して、葉先生の半生を描いている。

まだ肩の痛みが残る様子だが、お元気にいろいろなお話をしてくださった。大躍進が失敗した時代、文化大革命の時代の経験談、一人っ子政策の評価、改革開放後の変化についてのご意見など、実に興味深いお話をうかがえた。文化大革命のなかで武闘が行われた時期に、かつて活躍されて多くの病人を救った地方の人々が、先生を守るために竹槍を持って上京しようとするのを断ったというお話は、あの時代の緊迫感を伝えながら、先生がこの国に深く根を下ろしておられることを示している。

西門の鑑真像については、日本人が寄贈したものだが、死後を弔う仏僧像は病院にはふさわしくないと建立には反対したのだと語られた。中日友好のシンボルではあろうが、たしかに病院に建てるのはいささか問題がある。人民大学構内の孔子像のことを申し上げると、儒教批判の共産党ともあろうものが怒っておられる。80年代から増え始めた幹部腐敗についても、鋭く批判されて、死刑も必要だと語られた。改革開放による市場経済化は、中国の貧しさを救うためには必要な政策だが、金銭崇拜になるようでは行き過ぎと批判される。齒に衣を着せない発言を通してこられた先生らしい反応だ。

マルクス主義を信念とし、中国共産党を信頼して生きてこられた先生は、中国現代史の証人として貴重な人物だ。まだ現役医師でいらっしゃるが、是非、自叙伝をお書きいただきたいとお願いした。

次の訪中の折りにもお話を伺わせていただくことにして葉先生とお別れする。

夕方、張先生が、中日経済研究センターの特別高級研究員の辞令をわざわざ届けてくださった。日本研究所へのエッセイ寄稿をお約束してお別れする。

最後の夜の夕食は、專家食堂で。隣の卓は、代田先生と清水先生ご一家。部屋に戻って、ワインの最後の1本を空ける。

1 / 8 (木)

朝、6時、樋口先生の帰国を見送る。7:45に院生の皆さんが見送りに来てくれる。荷物を下に運んでもらって、今後の打ち合わせとお別れの写真撮影。代田、清水、守屋、篠崎先生方も見送ってくださる。東京の引継会での再会を約束してお別れ。頤園公寓のフロントの皆さんとも握手してお別れ。

畔上さんが付き添ってくれて、アウディ2台で空港へ。4環路を通ったので早めに空港に着いた。運転の周さんと畔上さんに感謝してお別れ。

中国東方航空の中型ジェット機は定刻離陸、渤海湾、韓国上空を通過して島根あたりから入国、雪の少ない富士山を見て、3時に成田到着。6時過ぎ帰宅。

恵子たちが買い出しに行って、久しぶりのお寿司で夕食。

140日の中国の旅、無事終了。

【附録】北京日本学研究中心『センター通信』寄稿の離任挨拶「北京の140日」

3回目の中国訪問に、140日にわたる滞在の機会を得たことは幸せであった。北京市内や郊外の散策、国慶節休暇中の敦煌旅行で、中国の分厚い文化遺産の蓄積に接する喜びは大きかった。とはいえ、歴史を学ぶ者の性として、中国の文化遺産が、いわゆる先進国の軍隊や個人の手で、略奪されたり破壊されたりした跡を目の当たりにすると、歴史的先進性に潜む野蛮さ、近代を歴史の進歩の時代と唱えることの虚妄さを感じるが多かった。日本を含む列強諸国が、中国でおこなった蛮行を正当化できる論理はありえない。赴任に際しての自己紹介では書かなかったが、日本の行為にたいするささやかな贖罪の気持

ちを持ちながら、北京日本学研究中心の授業を担当した。

とはいえ、近代日本の蛮行をただ詫びるだけでは歴史家としての贖罪にはなるまい。日本を中国侵略へ駆り立てた動因を明らかにする歴史分析がなされなければならない。政治史、外交史からの戦争原因論は数多いが、経済史からの原因分析はまだ十分進められてはいない。私も『日本占領の経済政策史的研究』(2002年刊)で、連合国による日本非軍事化政策の歴史的合理性を検討したが、経済史的戦争原因論が未解明な学界現状では、暫定的な結論しか出せなかった。贖罪にはまだ遠い。

本道を進むには時間がかかる。センターの授業に未熟ながら戦争原因論を組み込むにしても、すこし別の方向からの贖罪を考えてみようと思った。それは、近代の経済システム、資本主義の限界を語ることである。資本主義は、これまでの人類史に登場した、最も経済成長促進型のシステムである。それは、最初に宇宙空間に人間を送り込んだソ連社会主義が、その後の経済成長競争で、資本主義に敗れ、無惨にも解体してしまった事実によって証明されている。中国も、改革開放路線に転じて社会主義市場経済を採用し、急速な経済成長に成功した。2000年の初訪問からわずか3年後の北京滞在でも、中国が達成した変貌の大きさには、まさに桑海の変を見る驚きを覚えた。もちろんこれは慶賀すべき変化ではあるが、この変化の向かう先になにがあるかについては、いささかの危惧を感じざるを得ない。

市場経済社会として成長するなかで、モノの豊かさの代償として失ったココロの豊かさの大切さを、いま日本人は、あらためて悔恨の念とともに認識し始めている。あるいは資源を蕩尽し環境を破壊して得られたモノの豊かさが、これから先、何十年何百年と享受し続けられるものではないことも理解し始めている。そもそも市場経済は、資源を最適配分する合理的なシステムと評価されているが、同時に、市場の失敗も指摘されてきた。資源配分が最適化しても、所得配分は差別化が激しくなることや、石油のような再生不能資源に関しては、現在の世代と将来の世代の間での配分の最適化を実現する機能は持たないことは明白である。

社会主義下の市場経済とはいえ、グローバリズムの時代であれば、市場経済が持つ本来の特性が、中国で顕在化しないという保証はなかろう。現実には、所得格差の拡大、自然環境の破壊、資源の過剰消費などは、日々の新聞で問題視される新しい難題になっている。このような時代に、日本の経験を踏まえながら、資本主義市場経済の限界性を、中国の若い人々に理解してもらうことは、中国の将来を設計していく上で、たぶん、有用ではないかと考えて、日本社会論のふたつの講義を構成してみた。

市場経済は、経済成長を実現する面では大成功をおさめるであろうが、その成功は、資源枯渇と環境破壊を極限にまで推し進めて、最後には失敗すると見通して、市場経済の失敗が、人類史の致命的な失敗となることを避けるために、市場経済とは異なった新しい経済社会システムを構築するべきであるというのが、講義のライトモチーフであった。

中国の社会主義市場経済は、今はその後段の「市場経済」に力点が置かれてきているが、

それは「成功が失敗のもと」となる危険な方向でもあることをあらかじめ考慮すれば、前段の「社会主義」による「市場経済」の制御システムを巧妙に導入することで、新しい経済社会システムを構築する可能性があると思われる。

経済成長をエンジョイし始めた中国の若者に、市場経済の前途についての暗い予言を語ることは、いささか罪作りなことだと感じはするが、経済成長のユーフォリア、モノの豊かさの魔力に囚われてしまう前に、選ばれた若者達が、歴史の真実を学ぶことによって、中国の将来を正しい方向に導いてくれることを期待しての講義であった。これが、私の贖罪のひとつの仕方と認めていただければ、これに勝る慰めはない。

(2003.12.28)

北京日本学研究センター引継報告会

2004年2月3日午後4時から、国際交流基金の日米センター大会議室で、引継報告会が開かれた。中国側から徐主任、日本側年間派遣の代田主任、清水副主任、篠崎先生と2003年秋学期派遣教員の皆さん、事務の畔上さんが参加して、2004年派遣教員の皆さんと引継をおこなった。社会コースでは、東京大学大学院教育学研究科の広田照幸先生が2004年春学期に赴任されるので、19期院生4名について、研究課題と研究進捗状況をお話した。懇親の席では、新しく赴任される方々へ北京生活のノウハウをお伝えしながら、北京の思い出話に花が咲き、あっという間に時間が過ぎ、またの再会を約してお別れした。これで、中国派遣の仕事は、公式には終了。